



「高齢者・障害者なんでも110番」に参加して」

月1回の電話相談およびFAX相談「高齢者・障害者なんでも110番」は、兵庫県弁護士会館で午後1時からスタートする。午後1時にほとんど1本目の電話は入る。受話器は2つ。4人のメンバーに緊張感が走る。

「はい、高齢者・障害者なんでも110番です。この電話は、弁護士と（社会福祉士0r精神保健福祉士0r司法書士）が同時にお聞きしておりますので、その点ご了解ください。」と対応する。まず、相談者の話しをよく聞く。相談内容に応じて専門職種に交代する。1本の電話に対応する時間は長くても30分程度である。単に電話での相談にとどまらず、さらに継続相談・支援の必要があると判断した場合は、必要に応じて弁護士会（たんぼぼ）や地域包括支援センターなどを紹介する。また、いったん電話をきって専門職が協議後回答する事例もある。最初の緊張から次第に話にのめり込んで心情的に聞いてしまう場合もある。その場合は後で反省する。私自身の専門分野（高齢者関係）以外は、関係部署に再確認する事もある。

毎回、新たな気持ちと緊張感を感じながらの参加である。電話のない空白の時間にそれぞれの専門職の方に自分が抱えている問題について教えてもらうラッキーな事もある。それぞれの専門職がその場にいることを認め合いながらの対応は緊張感と充実感を感じることができる。

今後も高齢者虐待対応委員会のメンバーとともに社会貢献と自分自身のため「高齢者・障害者なんでも110番」に参加していきたい。
(富田久代)

「弁護士の“さん”へ」

「はこのようなもの」目というのは、新しいものを毎回見るたびに、一つ一つの構成要素をチェックし、その認識を足して「（例えば机）」という認識にたどり着くのではなく、「机はこのようなもの」というイメージで、脳の機能として認識しているそうです。それは脳がオーバーヒートを避けるための機能で「コップ」「パソコン」とかそれぞれインプットされている。

私にとっては、「弁護士」という職種も、「弁護士さんはこんな人」というイメージがありました。論理的で落ち着いていて、報酬などにこだわる...など。でも、合同の打ち合わせや研修、特に市町申し入れや研修で、いっしょにひとつの事を決めていく過程の中では、それがいい意味で「弁護士のさんはこんな人」に変わっていきました。当たり前前のことですが、弁護士の中でも得意不得意があって、プライベートもあって補い合って、専門職としての役割を果たしている。それが分かったことが、連携の入り口だったと思います。
(大村和也)

「弁護士と社会福祉士」

このチームに入るまで、私は「弁護士」という職業に対して正直なところ、特別な仕事、特別な人という感覚がありました。本来、もっともっと連携して仕事をすべき専門職のはずが、今まで機会があまりないからと勝手に疎遠に思っていたのです。実際、最初に会ったときも「弁護士」というだけで変な緊張感がありました。それからチームの活動を通じて多くの弁護士の方々と接し、今ではその緊張感も感じないほどとなりました。弁護士の中には、「社会福祉士」の仕事を深く理解してその資格を取得された方もいます。私たちは、その逆は出来ませんが、お互いが協力して見出していくものの中には、共通のものがあり、お互いに「熱い気持ち」があります。このパワーの源を虐待問題の解決にむけて注いでいけるチームの活動は、日常の業務では感じられない素晴らしいものがあります。

(段 真奈美)

「2008年度施設従事者虐待防止研修に参加して」

私が参加させていただいた施設従事者虐待防止研修は、施設従事者として虐待問題にどのように取り組むのかを検討するという事とともに、他者に対する伝達研修をどうやって行うのかという二つの視点を含んだ研修でした。虐待問題を紐解くキーワードとして、「不適切な支援」に気付くこと 組織として対応する仕組みづくり 質の高い支援(ケア)を目指しての取り組み、といったことが紹介され大変共感いたしました。

東京での虐待ケースをみても職員の自覚の無い所が大きく、そういった職員価値観の転換の必要性など、問題の根は深いと思います。施設においては、職員お互いによる「抑止力」というものがあると思います。その力をどうやって引き出すかが施設虐待防止のポイントになるかと思えます。

他の委員の施設従事者虐待研修に同行させていただき感じたことは、法人の理念がどれほど一般職員に浸透しているかということが、「介護の質」「抑止力」といったものに深く関係しているのではないかと感じました。

是非、私たちと一緒に委員会に参加しませんか。一緒に虐待問題に取り組みましょう。
(竹本 慎)

高齢者虐待対応委員会の動き

4月	5月	6月
21日 弁護士会主催「高齢者障害者権利擁護 なんでも110番電話相談会」相談員派遣協力	19日 弁護士会主催「高齢者障害者権利擁護 なんでも110番電話相談会」相談員派遣協力	16日 弁護士会主催「高齢者障害者権利擁護 なんでも110番電話相談会」相談員派遣協力
21日 東播磨ホームヘルプ事業者協議会研修 (講師派遣)		



Team-G

VOL. 5

平成 21 年 7 月 10 日発行

発行・編集:兵庫県社会福祉士会高齢者虐待対応委員会

兵庫県社会福祉士会三宮事務所 078-265-1330

この広報紙を通じてチームの具体的な活動の内容などお伝えしてきましたが、今回はこの活動を通してのメンバーの思いや今後に対するの意気込みなどご紹介いたします。本年度、本委員会では新規メンバーを迎えるべく研修も予定しております。チームについて更なるご理解をいただき、チーム強化のためにもご協力願えればと思います。

「高齢者虐待対応専門職チーム(以下、専門職チームという)の立ち上げに参加して」

兵庫県では、2006年4月に準備会を作って動き始め、2007年7月16日に社会福祉士会として正式に専門職チームを結成しました。以来、12市町への活用の申入れ、3市町へ派遣介入、6県民局圏域で述べ13回の研修、市町からの研修依頼に講師派遣をおこなって現在に至っています。

法律の専門家である弁護士と社会福祉の専門職である社会福祉士とがタッグを組むことで、多角的な視点が生まれています。両専門職が、お互いの専門分野を理解した上で役割分担すると支援の幅が厚くなったのです。高齢者虐待は、ある意味「社会の歪みの縮図」が家庭の中で起こっているといえます。そのため、色んな切り口をもつこと、継続的な支援体制の構築、目標設定した関わりをしないと支援者も息切れしてまいります。

今年、新たにメンバーを集めるにあたり、「継続できること」「一人一人が責任を持つこと」「抱え込まずチームで関わること」がこれまで以上に求められます。社会福祉士は、“ここまで関わってきた者で”ということに固執するのではなく、「(新たなメンバーも入れて)チームで関わる」意識をしっかりとつことが大切だということを専門職チームの立ち上げから関わって私が学んだことです。

(黒瀬吉史)

「施設従事者に対する虐待防止研修を行って」

「施設従事者虐待防止研修」に行かせて頂いて早1年半が経過しようとしています。今まで延べ300名位の施設従事者の方に、お話をさせて頂きました。何十年も経験のあるスタッフから、つい最近入った職員まで、本当に様々な年代、経験年数の皆さんを前に、一緒に「施設従事者による虐待とは何ぞや?」というのを考えてきました。結論として、施設従事者は「虐待」とは在宅で起こっている出来事で、我々には関係のないことである、と普通に皆が感じているという現実がわかったことです。制度自体には若干の知識があるものの「高齢者虐待防止法」の中に施設従事者も含まれていることに驚くスタッフの多いのに驚きました。しかし、在宅での虐待がクローズアップされる中、どうしてもそうなるのかもしれない。

介護現場は、昔も今も様々な年代、経験者が多く集まる場所です。しかもまだまだ閉鎖的な空間に陥りがちです。ストレスもたまりやすい環境です。

地道な活動になるかもしれませんが、これからも施設をゲリラ的に回って啓発ができるよう、そして常日頃の業務の中でスタッフ一人一人が「虐待」に対する認識を持って頂けるように頑張りたいと思います。(今年度からもう一人従事者研修を終えられた方が増えたので大変心強く思います！)

(高階和洋)

「出会いは??でも・・・」

いつも私がチームメンバーとの出会いで思い出すのは、第1回の虐待対応チーム研修の最後に「この研修を修了した人は今後、虐待対応チームのメンバーとして活動してもらいます」とのK氏(現委員長)の言葉を、まるで狐に包まれたような??顔で聞いていたメンバーそれぞれのなんとも表現しがたい表情です(おそらくメンバーの誰もが「えっ?」と思い、この瞬間改めて研修募集のチラシに書かれてある文書の記憶を深く呼び起こしたのではないかと思います)。そんな最初の出会いを、他の皆がどう感じていたのかはわかりませんが、そんな??な出会い(と言うか、半分仕組まれたような出会い・・・)でスタートしたチームが、今はメンバーそれぞれが自分の個性と強みを活かして活躍し、一つの素晴らしいチームになっている(多分・・・)のだから面白いものです(～。～)。とにかく、どんな出会い、始まりであろうが、大切なのはその出会いから皆が「何を生み出そうとしたのか」というその一つ一つの試みや過程であり、そのことを教えてくれた仲間の一人一人やこのチームの存在は、私にとって何物にも代えがたい、大切に誇れる存在なのであります。

これを読んで、少しでもチームに興味をもたれた方は、新人研修でお待ちしております

(水口 貴仁)



「チームメンバーとの出会い」

虐待対応専門職委員会メンバーの大半は、ばあとなあ研修修了者で精神保健福祉士の資格も持っています。老若男女個性豊かな顔ぶれが揃っていますので、人生の一時期、いい出会いをさせていただいたと喜んでます。

「ああ、こんな人もいるんだ！」に始まり、「この人のこんな考え方は素敵だな！」「外見で人を判断するなどはよく言ったものだけど、この人はまさにそれだな！」「この人にはこんな才能があるんだ、すばらしい！」「あらー、若い世代って、こんなにも理路整然と説得力のある言い回しで自分の考えを発信するんだ、すごい！」etc・・・。

メンバーとの交流は、新たな発見と驚きの連続でワクワクする一方、みんなのいいところ見習わなくちゃいけないけど私できないよ・・・と落ち込んだりもします。

メンバーのまとめ役である委員長は働き盛りバリバリの男性ですが、メンバーひとり一人への思いやりとフォローが心憎いほど行き届いています。そのおかげで、この2年間、メンバー全員が今日まで一緒に頑張ることができました。感謝！感謝！

(木高 壽子)

「チームに参加してよかったこと」

チームに加わったのは、職場や仲間と離れて淡路島にuターン、独立型社会福祉事務所を開業したばかりの頃でした。地域で働くなら「権利擁護」は必須！と、勢い込んで養成研修を受講したものの、「なんと真面目で精力的」「心細さが勝って、選択を誤ったかしら」と感じたこともありました。

市町への申し入れ、研修会、個別ケア会議や事例検討会への出務、メール相談等、活動を重ねるなかで、「高齢者虐待」というテーマの重さと地域で働くソーシャルワーカーの責務を、あらためて考えさせられ、また、メンバーのひとりとなりや魅力に触れることができ、今まで続いています。チームを組む弁護士、担当圏域で日夜奮闘されている地域包括支援センターの職員、皆様との新しい出会いもありました。今では、チームは私の大きな拠り所です。

淡路島からでも参加できています。県下広域から、新しい仲間が加わって下さることを心待ちにしています。

(吉田 麻希)

「2年間の活動を経て」

私が2年間チームを続けられたのは 個性豊かで素敵なチームメンバーと 自分たちと同じように地域包括支援センターで悩んでいるだろう社会福祉士を支援したいと思って活動してきたからです。正直なところ、メンバーとしての活動は決して楽なものではありませんでした。メールのやり取りは1年で1000通以上、休みを返上しての研修やそのための打ち合わせ、ミーティングと自分たちの勉強会…。個々人にかかるプレッシャーも少なくはありませんでした。しかし、それぞれの強みをいかしながら、ひとつずつ問題を乗り越えて今に至っていると実感しています。思いを共有できるメンバーと一緒に活動していると、自分が普段の仕事の中で忘れていた社会福祉士としての「価値」に気づく場面があります。どうすればもっと現場の虐待対応に役立つのかを真剣に討議していく中で、普段見失っていたものを見つけたり…。ちなみに、信頼できるメンバーと過ごすことが本当に癒されます。この癒し空間を見つけたことがチームに入って一番良かったことかもしれないですね。

(荒木 澄玲)

「チームに入ってよかったこと」

私は、福祉をしたくて、地方公務員になりましたが、一般行政職でしたので、福祉行政に配属されたり、他の職場に配属されたりで、定年前の13～14年間は福祉を離れておりました。しかし定年後は福祉の現場で働きたいという思いがありましたので、社会福祉士の受験資格を取り直して受験し、社会福祉士になりました。なんでも勉強しようとの思いから、発足時の高齢者虐待対応専門職チームに入れていただきましたが、如何せん最近の福祉現場の体験がないため、四苦八苦しております。

チームの皆さんは、この2年余りの間に、研修等の講師を努められる中で、立派に成長されていますが、私は一番後ろから着いて行くのが精一杯でチームの足を引っ張っているのではないかと自問しています。

そんな私であります、チームに留まって何とか、自立への糧にしたいと思えますし、またチームの皆さんが一員として認めてくださっていますことに、大変感謝しております。

(大田厚三郎)

「二足のわらじを履いて」

団塊世代の先頭に行く私は50代に入って社会福祉を学んだ。脳疲労もかなりたまっていたが学ぶことすべてが新鮮で、中でも社会福祉の価値観として「人間は存在そのものに価値があり、社会福祉はすべての人の人間の尊厳を守ろうとする価値観を土台としている」という内容にふれた時、胸が震えるほど感動したことを記憶している。そして、「権利擁護」のパイオニアと言われる池田恵理子さんが「社会福祉士としてのスキルは、経験が長いから、業界をよく知っているからできる、やれるというのではなく目の前の一人の人間の気持ち、立場を理解し寄り添えるか、その感性が必要だ」と述べられたことを支えにしている。

チームに入ってよかったことは、高齢者虐待はソーシャルワークの大事な要素がたくさん盛り込まれており、社会福祉士としての「感性」を磨いてくれる場であり、実践の場でもある。人間の尊厳を守るという「価値観」と「感性」を磨くという二足のわらじを履いて、自分自身を成長させてくれる得難いところであると思っている。同時に年齢を重ねても限界を突破して行く挑戦者としての勇気をいっぱいもらっている。

(長谷川民子)

「高齢者虐待専門職チーム（委員会）に入って」

ほんの軽い気持ちで参加した高齢者虐待についての研修、まさか参加＝チームメンバーになること、とは思いませんでした...。社会福祉士が専門職なのは当然のことで、専門職たる実力を付けなければいけないことは分かっていたのですが、いざ「専門職」という名前がつくとやる気が出るというよりびびってしまったのが正直なところで、あの時は自分の見通しの甘さにつくづく嫌気がさしたものです。

それからは黒瀬委員長のもと、チームのみなさんの「やってみよう！」という姿勢に引っ張っていただきっぱなしの状態です。でもそんな私でも少しずつ新しい経験をさせていただいて、専門職としての本当の意味での自覚が生まれてきたように思います。これはチームのみなさんの姿勢に学んだところがほんとに大きいです。チームに入って良かったこと、それは何よりチームのみなさんに出会えたことです。これからはまずチームの足を引っ張らないように、また「専門職」という言葉に決してびびらない社会福祉士を目指していきます。

(高橋順子)

「虐待についての研修を行って」

研修では、参加された地域包括支援センターや行政等職員の皆さんから、効果的な実践の展開が難しい状況や虐待対応ソーシャルワークを活用しきれていない等といった不安の声を多く聞きました。また、高齢者の権利を守ろうと、想いと現実とのギャップに悩み不安を感じながらもより適切な対応をしようと努めておられる力を感じました。

研修ではごく限られた時間の中で、虐待対応ソーシャルワークを展開する際の留意点等、実践のヒントとなるだろうことをお伝えしましたが、一朝一夕には難しくても、個人や組織、地域の課題を自覚して日々実践し続けることで、解決の糸口が見えてくるのだらうと思います。

皆さんの実践の一助となるよう、専門職チームの活動を、今後益々充実させていきたいと考えています。

(瀧本知里)

「届く言葉」



地域包括支援センターの社福士として所属法人の職員向けに「虐待研修」を受け持った感想です。

研修担当の現場職員と事前打合せをしていた時の事、普段感じていても立場上なかなか言い出せない事、この機会に上の人にも分かって欲しい事、色々出てきました。基礎的な知識を伝えると同時に、異なる立場の人達にもそれぞれの立場で「感じて」もらえるように言わば「二重構造」の働きかけが要るのだと痛感し、また「現場を知らないと言えない事」があり、「知り過ぎてても却って言えない事」もある事がわかりました。

伝えるべき知識を一生懸命話し続けるだけでは「届かない」。聞いてくれている人達と同じ土俵で、時々体温を感じながらタイムリーに「届く言葉」を選ぶ事が大切。そんな当たり前の事を改めて感じました。

(高見則子)

「高齢者虐待研修を振り返って」

平成 21 年 4 月に、チームに所属して以来、初めての研修講師をしました。ヘルパー事業所の管理者・コーディネータを対象に、高齢者虐待の基礎的な知識から、現場に置ける役割についてお話しさせていただきました。この研修にあたり思ったことは、私はチームの中では最年少で、他のメンバーに比べ経験も少ないため、正直不安が大きく今までに感じたことのないくらい緊張しました。しかし、他のメンバーからの的確なアドバイスや色々な面でサポートして頂いたことで、当日は反省点も多くありましたが、無事に終えることができました。日頃現場の一人として研修に参加するのと、講師という立場で参加するのでは、まったく別の視点で虐待を捉えなければいけないということを実感し、研修直後は自分の至らなさで落ち込んだりもしましたが、チームに報告をして研修を振り返ると、今後のチーム活動において、とても素晴らしい経験になったと思います。まだ日本の高齢者虐待における対応や周知は遅れていると感じています。チームの一員として虐待対応の知識や役割を啓発していく事で、少しでも悲惨な事件に繋がるケースを減らしていければ、と考えています。

(世戸千鶴子)

「専門職チームの地域住民（地域の支え手）対象の研修を通して」

08 年度 4 市 1 町においての専門職チームの研修に連絡係も含め関わらせていただきました。介護保険で対応できないサービスを立ち上げ家族の負担軽減を図ろうとしている市民、ご近所の虐待が疑われる方の見守りを悩みながら続けている民生委員、ギリギリのところ介護している家族の訴え、答えに詰まる専門職等、様々な地域の支え手の声を聞くことができました。町は人材の宝庫といいますが、まさにそのとおりです。高齢者虐待（虐待にとどまらず諸問題）をどのように市民が受け止めるかで高齢者・障がい者等のくらしと質が明らかに変わってくることを実感しました。いま暮らす場所の環境や生業を大切にしている人たちが、元気な地域にはいます。そこでは、世代を超えた人と人の関係性の豊かさがあり、それは都市部でも、農山村でも同様だと思われま。

(藤本和栄)